

【大いなる死】

『大般涅槃經』

藤田 宏達

一

原始仏教聖典には、仏伝の発端と見るべき記事が処々に散説されているが、仏陀の死とその前後のできごとについては、とくにこれをまとめて詳しく伝える経典がある。それは、パーリ聖典では、『長部』第十六經の『大般涅槃經』(Mahāparinibbāna-suttanta)で、まさしく仏陀の「大いなる死」(大般涅槃)を語る経典である。漢訳では、『長阿含經』第二經の『遊行經』(仏陀耶舎・竺仏念共訳)、『仏般泥洹經』(白法祖訳)、『般泥洹經』(訳者不明)、『大般涅槃經』(法顯訳)が、これに当たる。また、『根本説一切有部毘奈耶雜事』卷三十五 - 三十九(義浄訳)にも同じ記事が収められており、この部分にはチベット訳(Hdul ba phran tshegs kyi gshi)が現存するとともに、サンスクリット断片も中央アジアのトゥルファンで発見され、ヴァルトシュミットによって校訂出版されている(E. Waldschmidt, *Das Mahāparinirvāṇasūtra*, Teil I-III, Berlin, 1950-51)。なお、サンスクリット断片としては、『遊行經』の一部分に相当する法蔵部所伝のものもある(E. Waldschmidt, "Drei Fragmente buddhistischer Sūtras aus den Turfanhanadschriften," *Nachrichten der Akademie der Wissenschaften in Göttingen, I. Philologisch-historische Klasse*, Jahrgang 1968, Nr. 1)。

これら諸異本のうちで、パーリ本のみは、大善見王物語の部分を『大善見王經』(Mahāsudassana-suttanta)として『長部』の中に別出しており、また法顯訳のみは他の諸本のはじめの箇所当たる部分を欠く、というように、かなり相違する点もあるが、しかし内容的には大体同じで、いずれも仏陀晩年の歴史的事実に近い内容を伝える貴重な資料である。とくに、パーリ本『大般涅槃經』は、パーリ聖典の中で長い経典を集めた『長部』の中でも最も長い経典であり、西洋では早くから注目され、翻訳や研究がいろいろ出ている。わが国でも、林五邦訳(『仏涅槃經』香草舎、昭和四年)、平等通昭訳(「大般涅槃經」『南伝大蔵經』第七卷所収、昭和十年、及び『仏陀の死』横浜、印度学研究所、昭和三十六年)、中村元抄訳(『偉大なる死』世界古典文学全集第六卷『仏典』I所収、筑摩書房、昭和四十一年)があるほかに、近年の仏伝に関する著作には必ずといってよいほど引合いに出されているから、今日ではパーリ本『大般涅槃經』に近づくことが比較的容易になった。そこで、まずパーリ本によって、この経典の梗概を記すことにしよう。

二

『大般涅槃經』は、仏陀が、入滅の半年から一年ほど前に、マガダ国の都ラージャガハ(王舎城、現在のラージギル)のギツジャクータ(靈鷲)山に滞在しておられたときから始まる。そのころ、マガダ国のアジャータサットゥ(阿闍世)王は、隣国ヴァッジ族を征服する野望に燃え、仏陀のもとに大臣をつかわして意見を求めた。仏陀は、ヴァッジ人が

「衰退することのない七つの法」(七不退法)を守っているかぎり、征服しがたいことを示唆された。そして、それにちなんで、比丘たちにも教団が衰退しないための七つの法をいろいろ説かれた。

やがて、仏陀はラージャガハを立てて旅に出る。道を北にとり、まずアンバラッティカー園にある王の家に立ち寄り、ついでナーランダールのパ・ヴァリカーというマンゴー樹の園に滞在し、サーリプッタ(舎利弗)と問答された。このナーランダールにおける滞在と問答は他の諸本には何も伝えていないが、仏陀がナーランダールを通過されたことは、地理的に見て十分ありうることである。それから、北上してガンジス河の南岸に面するパータリ村に着かれた。この村では、マガダ国の大臣たちがヴァッジ族との戦いに備えて都市(城塞)を築きつつあり、仏滅後にはパータリプッタ(華氏城、現在のパトナ)としてマガダ国の首都となり繁栄するが、そのことが仏陀の予言のかたちで述べられている。ここでは、仏陀は在家の信者たちに、無戒者の五つの損失、持戒者の五つの功德などを説かれた。

ガンジス河の対岸はヴァッジ国である。仏陀はガンジス河を渡って、ヴァッジ国に入り、コーティ村で比丘たちに四諦の説法を行い、つぎのナーディカ村ではアーナンダ(阿難)の質問に答えて、仏教信者の死後の運命について説き明かされた。これは「法の鏡の法門」と呼ばれる。ついで、ヴァッジ国の都ヴェーサーリーに向かい、遊女アンバパーリーの所有する郊外の園林に着かれた。ここでは、比丘たちに対する四念処の説法があり、アンバパーリーからは食事の供養を受け、その園林を布施された。それから、ヴェーサーリーの近くのベールヴァ村におもむかれたが、その時インド特有の雨季が到来していた。そこで、雨安居(雨季三ヶ月の定住)をなすべく、比丘たちをヴェーサーリーの周辺に分散させ、仏陀はおそらくアーナンダ一人をともなって、ベールヴァ村で雨安居に入られた。この安居中に、仏陀は発病し、死を思わせるほどの激痛が起こった。しかし仏陀は苦痛をたえし、病を克服された。その時、アーナンダに対して説かれた教えの中には、「如来の法には、教師の[秘密の]にぎりこぶしはない」「如来は<私は比丘サンガを導くであろう>あるいは<比丘サンガは私に頼っている>と思うことはない」「この世で、自己を洲(または燈明)とし、自己を依り所として、他を依り所とせず、法を洲(または燈明)とし、法を依り所として、他を依り所とせずして住せよ」という有名なことばが含まれている。

雨安居が終わると、仏陀はヴェーサーリーへ托鉢に出られた。チャーパーラ霊樹の下で休息をとられた時、アーナンダに対して、如来は四神足を得ており、欲するままに一劫あるいは一劫以上の間、寿命を延ばすことができると言われたが、アーナンダは悪魔によって心を覆われていたため、仏陀にそのように寿命を延ばしていただきたいとお願いしなかった。そこで、仏陀は悪魔のすすめをいれて、ついにこれより三ヶ月後に入滅するであろうと決意された。この箇所は、どの諸本にも詳しく述べられており、『大般涅槃經』の大きなやまとなっている。法顕訳本はここから始まっている。

入滅を決意された仏陀は、ヴェーサーリー付近にいるすべての比丘たちを郊外のマハーヴァナ(大林)の重閣講堂に集め、かれらに対して三十七道品の説法をされるとともに、

改めて三ヵ月後に入滅することを予告された。そして、この地をあとにされるが、仏陀はヴェーサーリーを象が眺めるように全身で振り返って眺め、「アーナンダよ、これが如来の最後のヴェーサーリーの眺めとなろう」と言われた。バンダ村では比丘たちに戒・定・慧・解脱の四法の説法を行ない、その後、ハッティ村 アンバ村、ジャンプ村を経て、ボーガ市に到達された。ここでは四大教法についての説法がなされた。それから、パーヴァーにおもむかれたが、ここからはマツラ国に入られたことになる。仏陀は、この町の鍛冶工の子チュンダの所有する郊外のマンゴー林にとどまり、チュンダより食事の供養を受けたが、これが最後の食事となった。スーカラ・マッドヴァというものを食べてから、仏陀は赤痢のような病にかかれ、激しい苦痛におそわれた。だが、苦痛をしのいで、なおも旅をつづけられる。途中、路傍の一樹の下に疲れをいやして水を飲まれ、ブックサというマツラ人に会って金色の衣を受けられ、カクッター河では沐浴して水を飲まれたが、衰弱はひどく、すぐ近くの林で横たわって休まれた。そこで幾分か疲労が回復したのであろうか、仏陀はさらに歩みを進め、ヒラニャヴァティー河を渡って、ついに終焉の地クシナーラー（現在のカシャ）のウパヴァッタナというサーラ林に着かれた。仏陀は、アーナンダに命じて、二本のサーラ樹（沙羅雙樹）の間に、頭を北に向けて床を敷かせ、その上に右脇を下にし、両足を重ねて、静かに横臥された。ときにサーラ樹は時期はずれの花が咲きそったという。仏陀は悲嘆・涕泣するアーナンダに慈愛に満ちたことばをかけられ、また滅後の記念すべき四大聖地、葬儀の方法、塔供養などについて説かれた。クシナーラーの故事である大善見王の本生が語られたのも、この時であるが、それはパーリ本では別出されている。

仏陀の死が今夜半に迫ったと聞いて、マツラ族の人々が大ぜい集まってきた。スバッドという年老いた遊行者もやってきて、仏陀から教えを受け、出家・得脱し、最後の弟子となった。いよいよ最後の時刻が近づいたとき、仏陀は比丘たちを集めて、滅後の教団のありかたなどについて教誡を与え、なお何か疑問がないかと尋ねた。誰からも声がなく、すべての比丘たちに疑問がなくなっていることを知って、仏陀はこのように言われた。

「諸々の現象は滅びてゆくものである。怠ることなく、努力せよ。」これが仏陀の最後のことばであった。仏陀の入滅とともに、大地が振動し、天鼓が鳴りひびいた。

七日経って、遺骸は火葬に付された。送れてきたマハーカッサパ（大迦葉）の一行も荼毘に間に合った。遺骨はマガダ国のアジャータサットウ王、ヴェーサーリーのリッチャヴァイ族、カピラヴァットウの釈迦族など八つの部族に分配され、さらに遺骨の瓶と灰をもらい受ける者もいた。かくて、八つの舍利塔と瓶塔と灰塔との計十塔が各地に建立されるにいたった、という。

三

以上のように、『大般涅槃経』は、仏陀の大いなる死をめぐるのできごとを順序だてて詳しく述べている。ラージャガハからクシナーラーにいたる地名は、地理上の実情と正確に対応しており、それぞれの地における叙述も実際にあったできごとを髣髴させるものが

多い。

最初のラージャガハにおける七不退法の教説は、当時のマガダ国とヴァッジ国との政治的緊張関係を背景としたものであり、同じような事情はパータリ村におけるマガダ国の都市の構築という記事にも看取される。ヴェーサーリーにおいて、仏陀が遊女アンバパーリーから供養を受けたというのも、当時の新興都市の経済的・文化的状態から見てほぼ自然に理解される。ベールヴァ村で雨安居に入られた時発病し、小康を得られたことや、パーヴァーでチュンダの施食によって最後の病いにかかられたことも事実であるに違いない。仏陀がその時食べたスーカラ・マツダヴァについては、野豚の肉という説と茸の一種という説があるが、ともかくこれが罹病の直接の原因となったのは確かであろう。終焉の地クシナーラーにおける記事も、いろいろな史実を伝えている。スバツダが最後の弟子となったことやマハーカッサパの一行が遅れて到着したことは、どの諸本も伝えているから、本当であろう。仏陀の遺骸が火葬に付され、遺骨が分配されたのも事実であろう。分配先については、諸本は必ずしも一致していないが、一八九八年にカピラヴァットウの故地に近いネパールの南境ピプラーワーで発見された舍利壺は、そのふたの刻文からおそらくパーリ本やサンスクリット本などに伝える釈迦族に分配された遺骨にあたと推定されている。この遺骨がタイ国王室を経て、わが国にも分骨され、現在、名古屋の覚王山日泰寺に奉祀されていることは、周知のとおりである。

『大般涅槃経』は、このような歴史的叙述に対応して、仏陀の人間としての姿や仏陀をとりまく人々の様子も生き生きと描き出している。たとえば、仏陀がベールヴァ村において、自分はすでに八十歳に老齢に達し、身体はちょうど古ぼけた車が皮紐の助けをかりて動いているようなものだ、と言われているのは、仏陀の人間としての姿を如実にあらわしている。あるいは、仏陀の死を目前にして、侍者アーナンダが、物蔭に去って、悲しみのあまりひとり泣いていたというのは、いかにも胸に迫るものがあり、また、仏陀がアーナンダのいないのに気づいて呼びにやり、悲しみ嘆くな、なんじは長い間よく仕えてくれた、これからも努め励めよ、とやさしくことばをかけられたというあたりは、仏陀のこまやかな深い思いやりがあふれている。このような人間味豊かな仏陀の姿や仏陀を思う仏弟子たちの心情は、この経典の随処にうかがわれるのであり、読者の心を深くゆさぶるものがある。その点で、『大般涅槃経』は原始仏教聖典の中では、人間的な感動を強くよびおこす異色ある経典であり、伝記文学ないし歴史文学の作品として見ても、注目すべき傑作であると言わねばならない。

ただしかし、それだからといって、『大般涅槃経』は単に歴史的事実や人間としての仏陀のすがただけを記しているのではもちろんない。いわゆる仏伝文学のすべてがそうであるように、この経典には仏陀の神格化に伴う非歴史的・神話的叙述が処々に認められるし、またさまざまな教理的論議や思想的解釈なども織り込まれている。この経典は、要するに仏陀の大いなる死をめぐって、その宗教的真実を述べようとしたものであり、読者はそうした本来の意義を把握することが大切であろう。

この経典が仏陀の神格化にともなって、非歴史的・神話的な叙述をしている点については、多くの事例をあげることができる。たとえば、仏陀がガンジス河を渡られたのは、船や筏などによるのではなく、瞬時のうちに此方の岸から彼方の岸にとび越えられたのであるという。これは仏陀の神通力による神格化であるが、同時に此岸から彼岸への渡河によせて、迷いの世界からさとりの世界へ到達することを象徴的に表現したものと見られる。あるいは、仏陀がヴェーサーリーで入滅を決意されるについては、悪魔が重要な役割を演じ、入滅の地クシナーラーには、十方世界から多くの神々がやってきて仏陀の死を悲しんだというが、このような非歴史的・神話的な描写の背景にある考え方、すなわち、かかる描写がどうしても必要であったかという問題をよく考えてみなければならない。

また、この経典には教理に関する記述も多く含まれている。戒・定・慧の三学やそれに解脱を加えた四法、四諦、八聖道、四禅、四念処、「法の鏡の法門」と呼ばれる四不壊浄など、原始仏教の基本的な教説をはじめとして、八衆、八勝処、八解脱、四大教法、三十七道品などのような発達した教理も説かれている。もっとも、これらは諸本によってかなりの異同がある。例えば、パーリ本などで説かれる八勝処・八解脱の教説は、サンスクリット本などには欠くが、逆にサンスクリット本などで説かれる十二因縁説はパーリ本などには欠く、といった具合である。だから、こうした教理の問題について詳しく吟味するためには、すべての諸本を比較・検討してみるだけの用意が望ましいのである。

教理に関する記述だけに限らないが、『大般涅槃経』には、他の経典とほとんど同一の文で共通する記述が非常に多い。パーリ本について、リスデヴィズ (T. W. Rhys Davids) や فرانケ (R. O. Franke) が調査したところによると、この経典の三分の二ほどの箇所が、他の経典から挿入されたと思われる文もあるから、この経典に記されていることがらを直ちに仏陀の晩年に関係づけて見ることはできない。これは、とくに教理思想を取扱う場合、注意しなければならぬことである。

『大般涅槃経』には思想的に重要な問題がいろいろ示されているが、中でも注目すべきものは、入滅の解釈である。この経典の編纂者たちにとっては、仏陀のような神的存在が普通の人間と同じ死を迎えるというのにはあり得ないことであった。仏陀の入滅には、必ずや特別の理由がなければならない。そこで、経典は、仏陀に寿命の延長を懇願しなかったアーナンダの過失をあげ、仏陀の教化の因縁が完了したことを悪魔によって告げさせ、かくして仏陀がみずからの意志で残りの寿命を捨てられた、と説く。これは、仏陀の入滅が化縁完了による任意捨命であるとする解釈であるが、ここには歴史的存在としての仏陀から、永遠の存在としての仏陀への関心がはっきり示されている。かかる仏陀観は、後の『無量寿経』や『阿弥陀経』において展開したアミターユス (無量寿) の觀念や『法華経』の「如来寿量品」における久遠仏の思想、あるいは大乘の同名経典『大般涅槃経』における如来法身常住の思想につらなるものであり、その思想的意義は大きい。この点からしても、『大般涅槃経』は、仏陀の「大いなる死」の歴史的事実に即して、その宗教的眞実を明らかにしたものである。